

おに図書館

No.156

発行 おに図書館
 代表 青木 和子
 松本市牧の原1-104-416
 TEL 047-311-0886

講演会

ふくしまのいま

これからの日本

昨年3月11日の東日本大震災で、地震・津波に加えて福島原発事故で甚大な被害を被った福島県から郡山市在住の堀琴美さん（郡山女子大学講師・臨床心理士）をお招きして、現地の状況をお話して頂きました。

市内外から47名が参加して下さいました。福島から遠隔の地でありながらホットスポットになってしまった、東葛地区の方々の関心の高さと不安の大きさを、改めて痛感させられました。

堀さんは、講演会に先立って次の一文を寄せて下さいました。

「人が住めないほど汚染されてしまったフクシマの『甲通り』

という地区には、今も100万人が取り残されています。妊婦と赤ん坊さえ救出されず、学童疎開も実現していません。学校給食では福島県産の米と牛乳を毎日使用。甲状腺検査でシコリが見つかった子どもが36%もいます。が、放置されています。

除染をいくら頑張っても、これ以上はきれいにならないといふ山ほどの体験。それとは矛盾しながら広がる「放射能は安全だ」神話。

フクシマでは信じられないことがたくさん起こっています。他県から見えるフクシマの異常さは、諸外国から見えるニッポンの異常さと重なりますが、やがて日本全体がフクシマになる危機感を拭えません。

その前に『フクシマのいま』を知っていたら、間違ひがしめとあるべき姿を語り合えればと思います。』



次に、参加された方々のご意見・ご感想を紹介します。

● 今日のお話は重くて、福島だけでなく、日本人全体のことだと思いました。

現地の人の生の声、大変有意義でした。

● 今日ありがとうございます。去年より娘が6歳になります。

は外で遊ぶ事、外食をする事も多くなり、自分の中でも色々葛藤があります。主人も白血病で亡く、そのガンに遺伝は無いついわれました。放射能の事も重なり、毎日不安です。不安だけれども、どう行動しているのかわからず、毎日、生活していくのでいっぱいです。

堀先生が、お天気でもうれいくないとおっしゃっていました。確かに、緑がいっぱいの所で深く息を吸うこと、雨の日の次の日か、怖いのです。

でも、毎日必ず、3月11日の事、放射能の事を忘れず、伝えていくこと、これ一か出来ないのだからと思えます。

ありがたい事に、私の娘の通っている幼稚園では、お母様方が常にいつも考え、行動しております。私はその環境の中で、精一杯やっています。

今日は本意にありがとうございました。

●「フクシマ」の内なる熱い怒りの話を聞いて：

リアルな話を順序立て、理論的にレポートして頂き、知っているつもり情報の情報にさらに血肉がかった気がして、ますます怒りだけでなく、どう対応するかで頭がケルケル回りました。

被害直後から事象をわい少化する事に邁進する権力機構の人々は、恥と思わないのか。

直後の「放射能は、直ちに健康に影響を及ぼさない」をくり返した政府発言以来一年半、何ら反省は無い。「想定外」で覆い尽していたのと思ひ出す。チエルノアイリの26年後の今は、「フクシマの未来」を学ぶのであれば、先日の健康調査の始末は許せない位のレベルだと横る。

私は、今回の一連の出来事に誰も責任をとってない事により、また次の被災が繰返される事を憂い、福島県の武藤類子さんをリーダーとする集団告訴の一万人同志を募る活動をして、絶対に風化させないと覚悟している。

この一年半、集会や学習にも、デモもパブリックコメントも、出来る限り参加してきたが、やはり根本は原子力基本法を変えろ国会議員を選ばないと始まらない。その意味で、マスコミが権力側に立つのではなく、ジャーナリズムの本来に立ち返るべきだ。

国工を汚し、ふるさとを失わせ、国民の精神まで分断させた根源的責任者を糾弾し、鉄槌を下す必要がある。それは、ともすれば忘れ易い私運日本人にとって、義務と思えるのです。

先日、海外ですごい事例が示されました。イタリアで起こった

地震の直前には「大地震は無い」との見解を示した地震学者6名と関係者1名に、禁錮刑が下された厳しさです。地震学知困難の理解を超え、災害風化防止の考えがあったと思わざるを得ません。

塩崎俊一

●良い会でした。

講師の方のお話に加え、参加されている方々が福島や原発をよく考えておられ、それらの声の一つの場でも共有されていったことが、とてもすばらしかったですね。

福島のことをこのように考えていこうという「おーい図書館」の姿勢に、改めて敬意を表したいと思いました。

遠い千葉市からやって来て、本当に良い時間でした。

講師の先生、「おーい図書館」の方々、本当にありがとうございました。
高梨綾子



●2011年3月11日から1年7ヶ月が過ぎ、千葉県市川市に住む私は、「福島は、遅いながらも少しずつ除染も進み、だんだん元の生活に戻りつつあるのではないかと」と楽観的に思っていました。

郡山市に住んでいらっしゃる

堀琴美さんのお話を聞いて、改めて原発事故の恐ろしさを思い知らされました。

「人が住めないほど汚染されたしまったフクシマの「中通り」という地区には、今も10万人が取り残されていきます。妊婦や赤ん坊さえ救出されず、学童疎開も実現していません」ということです。驚きました。全く知りませんでした。また、甲状腺の検査を受けた子供のカルテを見せてほしいと言った親に対して「情報開示請求をしなければ見

せられない」という状況になっている事にも驚きました。

テレビや新聞などのマスコミからの情報だけに頼っているのは、私たちは真実から疎外されていることを、改めて感じました。

堀琴美さん、現地からの貴重な情報をありがとうございました。
四本仁子

●福島県の現状、郡山の現状には言葉が出ません。

被曝地である松戸では、身につまされる話ばかりです。

被曝の程度の差はありますが、若い人・お母さんたちは同じ思いをしているのが、わかりました。

松戸ですえ「こゝで子育てをしていて良いのか」「取り返しのないことになりはしないか」「将来何かあったら、子どもに申し訳ない」と、日々思い悩んでいる人がたくさんいるのです。ましてや

福島や郡山では、と想っていたのですが、実際の話を知りて、その深刻さが伝わってきました。

参加者の子育て中のお母さんたちの感想からも、日頃は表に出せないでいる切羽詰まった思いが、ひしひしと感じられました。

松戸でできることは、まず松戸の子どもたちの健康を守ることだと思えます。首都圏の中で、多量の放射能が降った被曝地である千葉県東葛地域・茨城県南部地域・埼玉県東部地域から、声を上げていくことです。

700 km離れた地域で、これだけのことをやっているという事実が積み重なれば、きっと福島県の子どもたちの役に立つと信じて、自分のできる活動をしていきます。たいへん疲れることですが、事故が起きる前に原発を止められなかった責任は、私たち世代の全員にあるのですから。

武笠紀子



●講師の方の、子どもや子を持つ母の目線での話、時に怒りをこめての話し方に、臨場感を持って聞くことができました。

また、若いお母さんの子どもの健康を心配する気持ち、親は現地に住んでいるのに自分たちだけ遠い松戸に住んでいる罪悪感の気持ち、等々の発言に胸が詰まる思いだった。

その時、私も一言発言すれば良かったと、後で思いました。まずは、勇気を持って講演会に来てくれたことに感謝。

それと、親としての気持ち―親は自分の事よりも、我が子・孫の幸せを一番大事に思っているのだから、あなたたちが安心して(松戸も、あまり安心ではないけれど)暮らしているのが一番の親孝行よ。そして自分たち

も親の事を大切に思っている気持ちも表していれば、それだけで親は嬉しいものです。今のお気持ち、ご両親にはもう十分に伝わっていますよ」と言いたかったのです。

大石民子

●南相馬、浪江町にポイントがあり乍ら、現地を見ていないので、是非お話を伺いたいと思いました。

琴美さんのきちんと整理されたお話を聞き、うなずくばかりで、時間がアツという間に過ぎ、もともと聞いていた心境でした。被災者の悔しさ、憤り、悲しみが伝わってきました。

最初、県知事が必ず福島を復興させると言ったのに、2年近く過ぎてしまった。30年も戻れないと言いつつ、仮設やペンション住まいもないだろうと、何も出来ない自分なのに、腹を立てていました。お話を聞き、やっぱり行政って

何も変わってなくて 依然として
弱い者いじめなんです。ね。

また機会が有りましたら伺いま
す。ありがとうございます。

間部美智子

●未だに高い放射線量の中で内
都被曝にも脅えながら、それでも
その地で日々暮らして行かなけれ
ばならない郡山の人々―胸が痛く
なりました。

私達に何かできることは？

「福島を決して忘れないこと」
そのための証の一つとして、南相
馬市の学校給食センターへ、また、
やのながら野菜を届ける活動を続
けていきたいと思っております。

（活動先、東日本大震災被
災者支援千葉西部ネット）

今川和子



●塩先生にはお忙しい中、郡山
からお越しいただき、福島の現
状をお話いただきました。

当日の参加者は何名。幅広い
年齢層に亘りました。

行政府やマスコミからの情報
に囲まれ不安や疑問が膨れ上が
つてる今、福島のありのままの
様子を市民の視点で話して頂け
たのは、大変有難いことでした。
タイムリーな企画にも感謝です。

一年半を過ぎた今でも多くの
人たちが汚染地区から移動でき
ずに留まり、若い世代・妊婦さ
んや赤ちゃんさえ住み続けてい
るとのこと、学校給食には福島
県の米や牛乳を毎日使用してい
ることなど、胸が詰まる思いで
聴きました。また、カウンター

は感度が低いものを使用してい
ること、支援のお金は未だに殆
ど使われていないことなど、改
めて憤りを感じました。

松戸市も、一般家庭の測定・除
染が始まりました。除染の難しさ
を耳にしますが、まずは松戸市で
の測定器の感度や測定方法の背景
からもっと勉強して、何が真実な
のかを見極めて、反原発を地道に
進めなければならぬのでは、と
思いました。

すでに一年半、更にこれからも
続く放射能汚染の影響下で如何に
過ごすのか？疲労感・社会的閉塞
感・タブーに負けないように、疑
問と怒りをもちんと持ち続けたい
と、改めて感じました。

どの世代にも誰にも出来ること
はあると思います。安心して住め
る国を次の世代に残せるように、
諦めずに小さな何かをし続けまし
ょう。

島佳枝

●今だに手の打ちようがなく、放
射能を出し続ける福島第一原発。

中通りだけでも100万人の人たちが
と、残されているといふ。

国が声高に言う「命の大切さ」
とは、誰の命のことなのでしょう。

飯島由美子

●被災地ではまだ被災者は仮設住
宅に暮らしていたり、医療者が不
足して、精神科の診療所や病院が
無いといふ。た現状を伺いました。

その一方で、復興予算の流用。
私も憤っています。とりわけ「日
本原子力研究開発機構」の核融合
エネルギー研究に42億円とか、被
災地とま、たく関係のない軍事費
などなど。

福島県の現地に居ると怒りと閉塞
感で一杯で、たまに県外へ出ると
世間ってこんなだったんだと思う、
という言葉が心に残っています。

また、当日配られた「婦人保護
事業50年」(林千代編著、ドメス
出版)より抜粋された堀氏の小論

「古くて新しい課題(現場から
の証言)」にも、惹かれるもの
がありました。 秋津那美子

●実際に福島で生活している堀
さんは、それだけでリアルな空
気を運んで来られた。

郡山市内小中学校の給食に関
する女子学生運のフィールドワ
ークの苦労話は、理屈に合わない
現実の憤りを、学生達以上に
その悔しさを噛み締めた事と思
いました。

「ナヤかな松平でのひととき
でした。彼女の鞆から取り出
したガイカガウンターは「あら
室内は郡山とあまり変わらな
いね!」の一言を吐かせるもの
でした。 梁・木村真喜子



●福島県に住んでいる方の話を
あんなに詳しく具体的に聞く機会
など滅多にありません。

福島出身の若いお母さん方の心
配を聞きながら、ヨードの配布を
県が止めたとか、役所だけが被災
地に先に帰って行って、被災者を
置き去りにした村とか、復興予算
に「日本再生」という言葉を入れ
て、被災地以外で使用できるように
にする再知恵とか、腹立たしいこ
とばかり。

今度の選挙では原発賛成の党に
は投票しないよう、庶民の怒りを
結集しましょう!

次は、当日話したかった私の体
験を二つ。
①原発は、微量の放射線をふだん
から出している。

私が静岡県の浜岡原発から10km
ほどの職場に勤めていた時、毎年
養蜂業者が、花の香りがする取れ
たてのおいしい蜜を売りに来ていた。

ある時、「浜岡へ行って損しち
かった」と彼がつぶやき、「どう
して？」と聞いたら、持って行っ
た蜜蜂が殆ど全滅してしまっ
たというのです。

放射能に敏感な昆虫が、原発の
危険性を知らせています。

②大人より、未来ある子供への影
響を考へること。

現在、流山市で読書会を開催し
ています。

昨年の会合で、ある有名大学出
身で本を何冊も出している会員が
「放射能は怖いというけど、死者
が出ていない。そんなに恐がるこ
とはない」と言い出しました。

私は直ちに反論しました。

「恐ろしいのは内部被曝で、今
後何年かしたら、癌を発生する
かも知れない。死期が近い年寄り
はあきらめもつくが、これから生
きていく将来ある子どもを
考へましょうよ。」

彼は沈黙しました。

鈴木光治

●目の前の女の人の肩が震えて
いた。3・11以来、目に見えな
い放射能に恐れながら子育てを
しているお母さんだ。

彼女の祖父の家は、相馬の小
高地区で、津波と原発事故の影
響で帰ることも出来ないとい
う。テレビの中の話ではない。

現実には、こういう人がいるのだ。
「原発は危険だ」と言われ続
け、知っていたのに、反対の声
を上げなかった私である。責任
は私にもあるのだと、今、痛感
している。

私は、今後電気が無くなり、
自分の生命がおびやかされる事
態が起ころうとも、原発は絶対
に反対です。

鎌瀬容子



●3・11の地震・津波、その後の
原発問題は、日本を揺がしました
然し、原発問題は福島のみでなく
日本、地球の問題です。

黒を黒ではなく、白として解決
しようとする考え方は間違ってい
ます。確信しています。

苦しくても、真正面から問題に
あたらずなくては、解決できません
よね。

今回、福島の様子を知る事がで
きました。

大学は、真実を探求するところ
です。遠慮せず、進んでいた
たいと思いました。

原発問題は、風化させてはいけ
ないと確信しました。 西山怜子

●塩先生のおはなしを伺って、福
島の大変さと苦悩を、改めて思い
知りました。

終わらない原発事故。福島第一

原発四号炉がどうなっているのか、状況を把握しなければならぬ。曰。未だ、仮設住宅での生活を強いられている人達。

歴史的にみて、日本は災害の多い年代に入っているようで、福島の状態は他の地域でも起こり得るという不安の中で暮らしています。また、各地で発生している、汚染物質の保管場所をめぐる問題があります。被害を広げないためにも、原発のそば、人の住めなくなつた所に、まとめて保管する事はできないものでしょうか。汚染物質を各地へと運ぶことによつて、住めない場所が増えていくよつで心配です。

2歳と4歳の孫を見てみると、「悪い時に生まれてきたなあ」とかわいそうになります。最後はもう神頼みという事で、神社仏閣に行った時に、「どうぞ、日本をお守り下さい！」とお祈り

することにしています。

願いが届きますように……

中島幸

●子どもを心配するお母さんたちに共感して、涙する堀さん。情報を隠し、嘘をつく東電と行政に憤る堀さん。学生たちを信じて、実地で体験させ学ばせる堀さん。「浜通り」の人々を思ひやつて、「国の責任で、帰村してはいけないと言ふべき」という堀さんに共感しました。

福島県の健康調査の結果、癌を含む甲状腺異常の子が多く見つかったのに、そのデータを本人にさえ開示しないという奇妙さは、かつて広島・長崎のABC（後の放射線影響研究所）がやつてきたことと同じです。人々の「命」より、国家（アメリカ）の軍事利益と資本の利益を優先し、「命」の危険を知ら

せる秘言を封じ、抹殺してしまつた。今、そのことに気付いた者たちが立ち上がり、声を上げています。

フクシマを孤立させないよう、息の長い行動を継続していかねばなりません。 神悼子

後記



遠路はるばるいらして下さり、「現地から」ならではの、福島への思いあふれる熱のこもつた講演を聞かせて下さつた堀さん！本当にありがとうございます。 原発事故がいつになつたら収束するのかわからない不安の中で生活しておられる福島の方々のことを、忘れたかめようにも思える世間の風潮に抗して、私達に出来ることで支援し続け、行動し続けなければと、強く思いました。